

朝日新聞(2011年12月2日付)より

5月、一冊の本が届きました。題名は「Beフラット」。2年前にインタビューを受けた、気鋭のノンフィクション作家、中村安希さん(開高健賞)からでした。鋭い観察、切れのある文章、本質を突いた内容。今の情けない国会の現状を等身大で伝え、国会議員を「仕分け」。多くの絶望と、それでも捨て切れない一筋の光。私は中村さんの中に「志」を感じ、その度胸と覚悟に胸を打たれました。



2

# ふわふわ政治家退場願う



79年生まれ。日本で社会人生活をした後、世界を旅する。その経験を書いた「インパラの朝」で開高健ノンフィクション賞を受賞。

中村 安希さん(32) ノンフィクション作家

国会議員にインタビューをして本を書きませんか。出版社から話ってきたのは、政権交代から半年ほどたったところ。30代になったばかりでした。政治に詳しくはない。政治ジャーナリストが書いた本を読んだことはない。政治家に会った経験もない。にもかかわらずこの仕事を引き受けたのは、私のように派遣社員やOL、海外留学を経験したとき女性が、真つさらの目で政治を書いた本が

もし、あれば、読んでみたいと思っただけです。20代から40代を中心に若い国会議員18人を選び、インタビューして「Beフラット」を書きました。パブル崩壊後に世に出た政治家のほうか、日本の現状を厳しく見ているだろうと考えたからです。実際に会って驚きました。「腹黒い人」というイメージを抱いていた政治家が、そうではないことが分かったのです。ほ

ぶつけたら、「心を明るく保てば、必ず未来はひらける」と。同じ世代に引きこもりやニート、のたれ死にや自殺者などが山のようにいる私たちに、言葉だけ「未来はひらける」と言われても、ちっともリアルではありません。実は18人の中にはもう一つのタイプがいました。具体的な目標を追求するミッション完成型です。社会の特定の問題に関心をもち、好意を抱いたので本に実名で登場します。小川淳也さん(民主党)や山内康一さん(みんなの党)からです。数が少ないのが残念ですが……。

政治に深入りはしませんが、一つやりたいことがあります。年金や消費税、原発などの問題を政治家に問い、どう対応し責任をとるか、イエス、ノーで答えてもらうのです。目的が明確でない政治家には退場願うのが狙いです。先行きが厳しい30代以下には、自己実現型のふわふわした政治家はいりません。(聞き手・吉田貴文)

朝日新聞(2011年9月18日付)より

4

# ザ・コラム



根本 清樹 (編集委員)

「政治家は、言葉で生き、言葉で滅びる」。民主党の松井孝治参院議員が、劇作家の平田オリザさんとの共著「総理の原稿」(岩波書店)に記した一行である。げに恐ろしい言葉の力。「どじょう」しかり、「放射能」しかり、であろう。松井氏は鳩山由紀夫政権の官房副長官。平田さんとともに首相のスピーチライターをつとめた。その「新しい政治の言葉を模索した266日」の内実を対談のかたちで明かした。今年4月刊。

2009年夏の高揚はすでに遠い。その後のいきさつを見れば、これは「敗戦の記録」にはかならない。しかし、「それはときに、勝ち戦の自慢話よりも、後生の糧となるかもしれない」と平田さんは書く。野田佳彦政権がすべり出しから言葉の取り扱いに手を焼いているいま、この小ぶりの本は一読に値する。

鳩山元首相の国会での演説は、ともかくも強い印象を残した。「いのちを、守りたい」。昨年1月の施政方針で何度も繰り返されたフレーズである。思い起こす有権者もおられるだろう。首相演説といえは「総花的で退屈」が通り相場だったから、全体を貫く主調音をしっかりと定め、これでもかと訴えかける手法はたしかに斬新だった。

松井氏らの推敲は60回、70回に及んだ。個別の政策課題を並べはじめたらきりがないので、「別紙参照」方式でやれないかと

## 言葉で生きるか 滅びるか

える、耳に残る演説をつくりたかった。新しいスタイルには批判もあった。気取っているとか、西洋かぶれじゃないとか。好き嫌いが割れるのはやむをえない。より大切な問題は別のところにある。あの演説はどこまで鳩山氏自身の言葉で語られていたのか。そういう疑問をぶつけてくる同僚議員が現にいた。「あなたの政治存在をかけて何がしたいのか」。鳩山氏に無理にでも時間をとってもらって聞き出したと、松井氏は振り返る。「本人のおなかのなかに本当に落ちている言葉」をつづったという自負はある。ただ、その言葉を政策の実現を通じて裏付けるにはあまりに政権が短命すぎた。「言葉が軽い」。政治批判の決まり文句である。鳩山氏も、国会演説以外の場面では不用意な発言を重ね、墓穴を掘った。言葉を粗略に扱う日本政治の重い病は、一朝一夕には癒えそうにない。

「だれかに伝える価値のある言葉」を語る政治家はいないか。新進ノンフィクション作家の中村安希さんは永田町を歩き、若手を中心に18人の国会議員にインタビューした。5月に出した「Beフラット」(亜紀書房)によれば、しかるべき言葉を感じたのはわずか2人だった。ともあれ2人はいてくれたというべきか。その一人、民主党の小川淳也衆議院議員(40)は当選2回。現在、党政調会長。正規、非正規に二極化した雇用や複雑な社会保障制度を、皆が生きやすくなるよう一元化し、真つ平らな社会をつくりたい。そんな小川氏の持論が書名にもなった。

小川氏はいま、「切り立った崖の上で震え上がっている」ような心境だと言う。この秋、自身の政治的信念と政策をきつしり書き込んだパンフレットをつくり、支持者らに配っている。「2050年までに消費税を25%まで引き上げ、社会保障給付を2割圧縮する」「さらにそれをどれだけ前倒して実施できるかを問うべきだ」。小川氏を駆り立てるのは切迫した歴史認識と危機感だ。日本は人口減少と高齢化の急進という千年単位の分岐点にある。政治

## 政治家の宿命